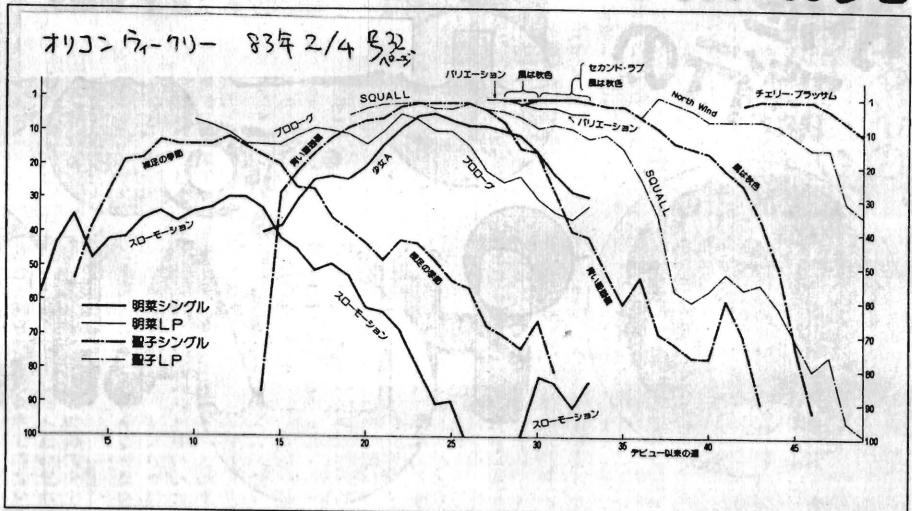


明菜 VS 聖子 比較研究



東大アイドル研の予想。83年聖子は明菜と武田久美子にトップの座を譲るが「パリエーション」と「セカンドラブ」の1位獲得でかなりの反響を引き起こしている(12月24日号、33頁)ので、主任予報官(氣象庁みたい)の私は、より精細な分析結果を報告すべき義務感にかられ、一筆したためてみました。

このグラフは、デビュー以来のシングル、LPのチャートアクションであるが、シングルに関しては、一見して明菜と聖子がほぼ同じパターンを示していることが見てとれる(手元に細かい資料はないが、岩崎宏美も同じパターンであったことは確かだ)。デビューシングルがじわじわと売れ、デビュー12週目にして最高ランクに達し、ゆるやかに下降すること、セカンドシングルは順調にベスト10入りし、23・24週目に最高ランクに達すること等、シングルのパターンは基本的に同じである。デビュー3週目までは明菜が上位におり、それ以後、30週目くらいまでは聖子が上位で、明菜がじわじわ差を縮め、30週目以降にはほぼ並ぶ、という相違があるが、これは、80年と82年のデビュー時の環境の差に大きく起因している。何といっても今年は新人ラッシュであり、明菜はデビューが遅かったのに対し、聖子は、良美には遅れたが、奈保子、よしえより2カ月前にデビューしている。そして、明菜の場合、デビュー2カ月前から全国キャンペーンを行い、プロダクションは小さいとはいえ社長がNTVの元ディレクターであり、NTVとワーナー・パイオニアの巨大な組織力と資金が将来

性のある彼女に惜しげもなく投入された。それに対して聖子は競走相手も少なく、CMソングで浸透も容易ということ、デビュー前の大々的宣伝は不要であったと考えられる。その結果が、デビュー3週目のHOT100入りで表われている。今春の女性アイドル宣伝合戦がいかに激しかったかは、北原、小泉、三田、堀、石川、早見、中森、伊藤、つちやがデビュー1週目にしてHOT100入りしている事実が切実に現れている。

エコーのCMソングとして、「裸足の季節」が順調に売り上げを伸ばし、ベスト10入りをねらうのに対し、明菜は激戦の中でスロモーションで、一進一退する(売上枚数は4週目以降、わずかづつだが伸び続けた、石川、早見の下降を尻目に踏ん張っていた)。明菜にとつて決め手となったのは、実は、デビュー10週目の早めのファーストアルバム発売であった。「プロローグ」は初登場7位と順調な売行きを示し、それに引き上げられて、「スロモーション」の売上も8、000枚ほど大幅にアップした。これによって、デビュー曲累積売上が今春デビューして、明菜は女性アイドル新人レースのトップに踊り出していたわけだ。この時点でシングル第2弾のベスト10入りもほぼ約束されていたのだ。12週目には8、590枚売れ、順位は30位だが、小泉がデビュー5週目に最高ランク22位を記録した際の枚数とほぼ同じである。

「プロローグ」で火がついた明菜に対

し、聖子のファーストアルバム「SQUALL」は、「青い珊瑚礁」がベスト10入りした週に発売され、「青い珊瑚礁」と「風は秋色」の大ヒット時に売れている。つまり、聖子の場合、初期はあくまでシングルでファンになった人がLPも買う、というパターンであった。その後、ニューミュージック系のライターを起用して質の高いアルバム作りをし、良いアルバムはアイドル歌手であっても売れる事を聖子は実証してみせたわけだが、これが明菜のプロデュース作戦に大きく影響した事は間違いない。デビュー直後のキャンペーンで早くもアルバム予定曲を歌い、予約を集めていたのだ。島田雄三ディレクターの、広い意味でのニューミュージックと歌謡曲の接点としてニューミュージックとも呼ぶべき曲を歌わしてみたい。(6月4日号15頁)という弁は、聖子の成功と「セラー服と機関銃」、「夢の途中」のヒットをふまえている。

その後の明菜の人気上昇も、アルバムとシングルの相互作用による所が大きい。「プロローグ」の高い評価が、「スロモーション」。「少女A」のセールスアップを促し、15・17、20・23週目の「少女A」の急上昇は「プロローグ」の再浮上をもたらししている。そして、「プロローグ」と「少女A」の蓄積が「パリエーション」の初登場1位となつて爆発し、さらに、それが「セカンドラブ」の大ヒットにつながっている。シングルとアルバムを交互に出し、その相乗効果が爆発的に売上げを伸ばしたわけだ。これまでアイドルにあまり手を染めてこなかったワダカ

らこそ、聖子や業師丸ひろ子から学び、明菜という逸材を得て成しえた新機軸の勝利である。

スタ誕で明菜を指名した会社は、11社中9社までがレコード会社であり、プロダクションはNM色の強い研音と演歌の第1プロ、というものの、既存のアイドル系プロダクションが評価のためによるのさ。明菜自身があつたことによるのだらう。それをうまく育てたスタッフの手腕は十二分に評価されるべきである。レコードリリースの他でも、明菜のスタッフの優秀さは頭初から抜きんでいた。来生姉弟のパラード、有線と地方の重視。ちよっとエッチな美新人娘。どれをとつても一味がう。百恵を思わせる「少女A」は一発逆転ホームランよりも、確実な中ヒットをねらつた妥協にすぎず、これからは明菜自身の世界を展開していくと思う。

その間から東大生のアイドル、武田久美子がデビューするわけだが、彼女は歌唱力もリズム感も抜群で、素質としては明菜に劣らない。明菜や聖子とそれほどタフではなく、百恵のように歌、ドラマ、映画の3つをほぼ同じウエイトでこなすことは無理なようだが、久美子は三刀流使いだから、その意味で、彼女こそ山口百恵の後継者たる資格がある。マッチ&クミのゴールデンコンビも期待できる。明菜は今でも表現力等では岩崎宏美以上のものであるので、ヒロリンのように歌一筋で行った方が良いと思う。聖子が、野菊の墓で無理をしてノドを痛めたような事が起こらないためにも、歌を第

一にしてほしい、と切望している。聖子に関しては、ピンク・レディーのように人気が一気に下落する心配はないと思うが、トップの座を維持するには若干の不安を感じる。女性ファンやアルバムファンへの獲得によって三年目の浮気を持ちこたえたいが、彼女の現在の人気は質は中島みゆきや松山千春のようなNMアイドルのそれであり、彼らとの違いはテレビに出る点にすぎない。ところが「野ばらのエチュード」における乙女チック路線への回帰、映画主演など現在の彼女のファン層の期待に答える内容のものか疑問である。聖子のファンクラブで作曲してほしい人の投票をみると、ユミミン、財津に次いで小田和正が高得票を集めている。彼女のファン層の求めている新しい変化の方向を示していると言える。オフォーのTVと聖子の映画には、マークを付けた。

PS 10月29日号で、初登場順位を固定ファン層の増減の指標としています。私は2週目の順位を重視しています。というのは、聖子の「青い珊瑚礁」。「夏」。「白いバラ」は、87、16、24位という低い初登場順位ですが、それは集計の週の区切りのため、発売後一週間たらない売上枚数に基いているからなのです。小泉、堀、三田の第2弾、堀の第3弾も同じです。

(東大アイドル研究会・主任予報官・平山朝治)

台頭してきた、ということないんじゃないか? 登場から2週目の順位をマークする、というのはなかなかスルドイ指摘ね。ただし第1週目でカバーするのは曲を熟知しているファンに限らず、アーティストの名前だけでも買つてしまふ、予約から購入へのファンが多く含まれるわけで、アーティストのパーフォーマンスを知り、重要な指針となりうるもの。この点を加味し、チェック・ポイントをいくつかに分けるとわかりやすいんじゃないかと思えます。